

寂聴記念会だより

題字 島田聖翠

発刊のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様のご多幸と益々のご発展をお祈り致します。

さて、昨年発足しました瀬戸内寂聴記念会では、「寂聴記念会だより」を年2回発行することに致しました。

編集部座談会より

徳島在住の編集委員三人（生長まち、大石征也、竹内紀子）が一年を振り返り、今年の課題などを語りました。

生長 寂聴さんが亡くなったとき、一生の間に人間とは、これほど膨大な仕事ができるのかと驚き、そしてその資料が徳島県にあるのも、素晴らしいことだなと思いました。

竹内 この一年は、執筆、展覧会、出版の手伝い、監修、シンポジウム、記念会の立ち上げ、イベント出演、記念碑制作の協力等、あらゆる仕事を得て、寄せてきましたが、周囲の協力を得て、予定通りこなすことができました。

だ、じっくり議論する時間も場もなかったのが、記念会のみなさんには、申し訳なかったと思います。「寂聴さんを後世に残す」という気持ちは、みな同じなので、今後いろんな方法を考えて、実践していきたいです。

大石 六月二十二日に記念会が発足した時、初対面の人が大半で、副会長を仰せつかったものの、緊張し、うまくやっていけるのかと不安でしたが、今では、だいぶんじんできて、先輩方を頼りにしています。ひとつの体制ができたと思います。欲をいえば、一堂に会して、熱く語れないのが残念ですが、コロナの現状では仕方ありません。

生長 四月の寂聴塾の追悼の集いでは、塾生が若いときに寂聴さんに出会って、それぞれが影響を受けて、人生を歩んでいるということを感じました。中村裕さんのドキュメンタリー映画では、最後の最後まで小説家だったということ、改めて感じました。

大石 展覧会は、四月からの徳島県立文学書道館での追悼展が充実して見応えがありました。八月から東京、大

第1号

2023年1月15日

発行 瀬戸内寂聴記念会

阪、京都でNHKサービセンタ―主催の追悼展があり、十月に京都会場を訪れました。十時に開場して、すぐに人が一杯になり、寂聴さんが京都の人たちに愛されていたことを感じました。昨年一番の成果は、なんといっても、機関誌「寂聴」を命日に創刊できたこと。中身の濃い内容になったことに、自画自賛ではありますが、手ごたえを感じています。次号から、このレベルを保つのは容易ではありませんが、よいものを目指して、編集委員一同、叱咤激励して、やっていきたいと思っています。

生長 十月の「寂聴忌 朗読会」は素敵でした。あ

ちこちで上演されたり、継続していったらいいと思います。

大石

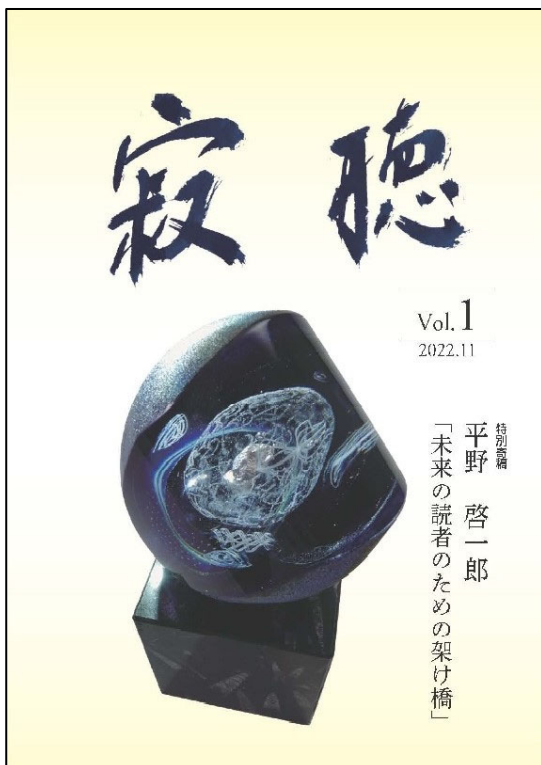
中・高校生に寂聴作品を朗読してもらう機会を

作るのもいいと思います。

生長 中・高校生に向けて、どんな切り口で紹介し、研究してもらおうかも考えていますね。寂聴さんの随筆は、とても小気味よいので、なぜあんなに書けるのかも考えたい。

竹内 ジャンルごとに紹介してもいいですね。小説だけでなく、職人をルポした『一筋の道』や『十五歳の寺子屋 道しるべ』という本もあります。源氏物語ではジュニア向けの上・下の現代語訳も出していますし。

大石 一般向けには、公民館で源氏物語現代語訳の輪読会などもできるんじゃないかと思っています。今年は、普及の方法を皆さんに考えてもらったらいいですね。



機関誌「寂聴」創刊号表紙

誤読のすすめ

—この社会を変えるために—

米本 浩二

瀬戸内寂聴さんの一周忌に合わせたトークイベントが十一月三日、徳島県立文学書道館で開かれた。瀬戸内寂聴記念会主催。同会の竹内紀子事務局長と私が「瀬戸内寂聴と石牟礼道子」の題で話をした。

徳島出身の寂聴さんと熊本出身の道子さん。全く縁がなさそうなふたりの共通項は「孤独」であった。小さきもの、虐げられた人たちへの全人格的共感という点でもふたりは似ているように思う。

水俣病患者の内なる声を聞き取り、『苦海浄土・三部作』を書いた道子さんは「水俣のジャンヌ・ダルク」と呼ばれた。支援団体の会長となった元教師の日吉フミコは大物政治家にも臆さずものを言い「火の玉」の異名があった。巡礼姿で加害企業に位牌をつきつけた浜元フミヨ。混迷する患者団体をまとめた胎児性患者の母坂本フジエ……。枚挙にいとまがない。女性なくして水俣病闘争（一九六八〜七三年）はなかったのである。

寂聴さんと道子さんが水俣で会ったのは七三年二月。水俣病闘争の終盤である。道子さんとの出会いを寂聴さん

が回想した文章がある。道子さんの母ハルノさんについて多くの筆を費やしている。ハルノさんは食と情で寂聴さんをもてなした。

「豆ごはん、野菜の煮物、新鮮な魚の干物の焼いたもの、どれも美味しくて私はものも言わずご馳走になり、当然のように空になった茶碗をお母さんの胸にさしだした。／「あんれ、まあ、このお方は……」／石牟礼さんの背を叩きながら、お母さんは子供のように足をとんとん踏んで喜ばれた」（『東京新聞』二〇一八年二月二日夕刊）。

石工集団を率いる父を支えたハルノさんは食べべごしらえを無上の喜びとしていた。「取材などの成功よりも、不知火の海とお母さんの笑顔が、私の心にしつかり焼きついた」（同）。寂聴さんは、女性史研究家の高群逸枝の取材のため水俣を訪れたのだった。男性中心社会にヘキエキしていた道子さんは逸枝の著作で生きる意欲を取り戻した。道子さんは喜んで寂聴さんを逸枝の夫らに紹介したのである。

逸枝を仲立ちに、寂聴さん、道子さん、ハルノさんがそろうた日のことを私はトークで「男性中心社会をぶっこわす、または揺さぶるための、女性たちの決起集会のおもむき」と表現した。一種の誤読であるが、デタラメでもない。

世界経済フォーラムが七月に発表したジェンダーギャップ（男女格差）

指数によると、いわゆる先進国の中で日本はダントツの悪さだ。韓国や中国、ASEAN諸国よりも下の一一六位である。女性に依存しておきながら、主導権は男性が握るといふ、いびつな構造の社会。なぜ変われないか。切ないまでの寂聴さんと道子さんの思いは次世代へと受け継がれるだろう。

一周忌は過ぎた。寂聴さんに心を寄せる人たちが、読書会や朗読に取り組むという。寂聴さんはテキストの中にいる。読み落としていることはたくさんあるはずだ。

よねもとこうじ（作家、本会会員）
一九六一年徳島県生まれ 福岡市在住
二〇二二年十二月一日付徳島新聞 「勁草を知る」より転載



11月3日 トークイベント「瀬戸内寂聴と石牟礼道子」

二人のマグマ

元水 薫

寂聴さんと石牟礼さんの関係に興味を持ち、記念会のトークイベントに参加した。

作家の米本さんが、「真逆のような二人が共感し合ったのは、二人が同じ根っこの孤独を持っていたことにあろう。『苦海浄土』は、母が息子を、姉が弟を説き伏せるように語る。その言葉は一人一人の胸に沁み込み、心に刺さる。男性中心社会に闘いを挑んでいる。そして、二人の生き方にも、共通のマグマがある。寂聴さんだけを見れば限界があるが、石牟礼さんを見れば、寂聴さんも見えてくる」と話されたことが印象に残った。

寂聴さんは、晩年、石牟礼さんと渡辺京二さんの恋を書き忘れたそうだが、残念ながら実現しなかった。もし実現していたら、どんな作品になったのだろうか。石牟礼さんはどのような女性に描かれ、その中に、寂聴さんは自分をどう投影させたのだろうか。私は想像を膨らませる。

それにしても、晩年の石牟礼さんに密着取材し、評伝も出版された米本さんが徳島出身ということで、寂聴さんと石牟礼さんの繋がりをより深く感じるこのできたイベントであった。

「寂聴忌 朗読会」を終えて

理事、MIKI朗読会代表
齋藤礼子

昨年十月十五日(土)に徳島市シビックセンターで、「寂聴忌 朗読会」をMIKI朗読会との共同主催で開催しました。瀬戸内寂聴記念会の初めてのイベントです。

朗読会のメンバーは、長年、寂聴作品を読み、親しんでまいりました。

一昨年十一月九日に寂聴さんが亡くなられて、驚きと悲しみの中、すぐに竹内紀子さんに一周忌に寂聴作品の朗読会を開くことを提案しました。

寂聴忌 MIKI朗読会 XI



主催：MIKI朗読会
瀬戸内寂聴記念会

10月15日 13時開演

シビックセンター

4階 さくらホール

入場無料

朗読

いずこより

場所

夏の終り

私解説

京まんだら

比叡

女人源氏物語

いのち

竹内紀子

藤村純子

宮本要子

森 裕子

庄野周代

伊勢恵子

齋藤礼子

全員



当日は、約一四〇名の方が来場されました。休憩をはさんで二時間半、寂

聴さんの生涯に想いを馳せながら、静かに作品を聞いてくださり、「寂聴さんの作品は読んだことがなかったが、是非読んでみたい」「読み手の声に引き込まれて作品の世界に浸ることができた」などの感想をいただいています。

朗読した作品を順にご紹介します。

一、「いずこより」朗読 竹内紀子

雑誌「主婦の友」に一九六七年一月号から二年半連載した自伝小説です。夫の元に置いてきた娘に、こんなふうには生きてきたと正直な遺言を残すつもりで書き始めました。

二、「場所」朗読 藤村純子

寂聴さんが出家する五一歳までを書いた小説です。野間文芸賞を受賞し、最高傑作だと評価する人が多い作品です。

三、「夏の終り」朗読 宮本要子

二人の男の間で揺れ動く女の愛の迷いを描き、四〇歳で第二回女流文学賞を受賞します。

四、「私解説 美は乱調にあり、諧調は偽りなり」朗読 森 裕子

伊藤野枝が無政府主義者大杉栄と運命をともし、二八歳で権力によって殺されるまでの生涯を描いた作品の、寂聴さんによる解説です。

五、「京まんだら」朗読 庄野周代

京都祇園のお茶屋を舞台に、舞妓や芸者たちのドラマが、京都の四季と伝統行事とともに描かれています。

六、「比叡」朗読 伊勢恵子

自らの出家前後や得度式の様子、比叡山横川の行院で若い僧たちとともにした命がけの修行などが、描かれています。

七、「女人源氏物語 六条御息所のかたる」朗読 齋藤礼子

六条御息所は、誇り高いがため、嫉妬深く、愛に苦しみ、時空を超え生霊となつてあらわれます。

八、「いのち」朗読 全員

作家仲間である河野多恵子、大庭みな子との友情を描き、二人を見送り、晩年は病と闘いながら「書くことが生きていること」と情熱を燃やし、作家として生きた寂聴さん最後の長編小説です。

朗読は、作者の書いた文字の言葉を音(声)の言葉で聞き手に届けることです。聞く人の心に届き一緒に感動することができたかどうかと、常に問われ続ける世界です。

これからも、寂聴文学の素晴らしさを、少しでも多くの方に語り伝えることができよう研鑽を積んでいこうと思います。



寂聴忌 朗読会 出演者(右端が筆者)

『寂聴』創刊号の

エッセイを読む

副会長 大石征也

年が明けた。皆さん、お元気ですか。昨年十一月九日の一周忌にあわせた顕彰活動のシンボルとして注目され、著名な作家の寄稿が話題になった記念会の機関誌『寂聴』。ここでは的を随筆にしぼり、紙幅の許す範囲で、マスコミの筆が及ばなかった掲載作を紹介します。

◎吉岡省二 「寂聴さんの万華鏡」

ホテルマンの目に映った寂聴像。イベント企画の仕事を通じて近づきを得た氏の、率直な人柄を感じさせる好エッセイ。

◎賀来真留加 「話す人」

『SWITCH』（編集長＝新井敏記）主催のライティング講座への参加がきっかけとなり同郷の有名作家の存在を再認識、その小説を読み始めた経緯をさわやかに語る。

◎鷹尾奈津子 「寂庵を二度訪ねて」

二〇〇三年開講の寂聴文学教室の受講生だった当時十七歳の私。最初の訪問が京都進学をうながし、京に住む大学生としての二度目の訪問につながっていく。心に人生の師をもつ人は幸いだ。

◎那賀川眞理 『孤高の人』を読んで

ロシア文学者・湯浅芳子との交流を描いた寂聴作品を取り上げた。この「一筋縄ではいかない人物」への親愛の情。読ませる。

◎三矢智子 「作家と作品」

氏の次男の遍路日記が素材になっているという掌小説「迷路」。虚実ないまぜる作家の創作方法がうかがえて興味ぶかい。

◎本田耕一 「タージ・マハルの思い出」

二十代後半に寂聴塾で聞いたインド体験の話、四十歳のときの同地への一人旅、そして現在をつなぐ随想。小粒だがキラリと光るさまは宝石のよう。

◎野田雄一 「いつの間にか誘われて」

ガラス作家として大成した氏が、来し方をふりかえり、寂聴塾における瀬戸内氏の発言を克明に記す。初めは絵描きを志して斎藤真一の門をたたいたという模索の日々もしのばれる一篇。

◎生長まち 「今から ここから」

寂聴塾で出会った師のひと声で詩の呪縛から解放された私。この人らしい内省的な文章。「力まず、むしろ自然体で」というのがいい。

「寂聴のことば」から

私は休むためや、眠るために今の生活を選んだのではなく、より一層、鮮やかな生き方と、生命の完全燃焼と、全き魂の自由を求めて新しい生活に飛びこんだのである。

「人間家族を捨てるまで」

婦人公論一九七四年九月号より

◎清重康代 「拝啓 瀬戸内寂聴様」

寂聴塾で目にした師の美しい手、コンプレックスを感じていた自分の手、没後公開のドキュメンタリー映画を観ていて気づいた九十九歳の右手。定年後も聴覚支援学校で働く氏の、着眼点が素晴らしい。

◎鷺尾博子 「寂聴先生に伝えられなかったこと」

日航機墜落事故で妹を失った氏は、昨年五月、三十年ぶりに御巣鷹山に登り、惨状の場が「聖地」に変わったのを実感する。また、無常とは希望でもある。今は亡き師に伝えなかったのはこのことだろう。

以上、駆け足ながら。

引き続き第二号への執筆を期待しています。

編集室から

次の「寂聴記念会だより」は五月五日の発行を予定しています。

会員のみなさんから、「寂聴」創刊号の感想や、近況報告をまじえた自己紹介等の文章を二〇〇字以内で募集します。

締切り…

四月二〇日

宛先…

瀬戸内寂聴記念会事務局まで

みんなで飛躍の年にしましょう。

ご投稿をお待ちしています。

瀬戸内寂聴記念会 事務局

〒770-0856

徳島市中洲町3-40-802

Fax 088-661-3292

email norikomizugame@yahoo.co.jp

事務局長 竹内紀子